

公共空間の再生に効果的な社会実験のデザイン手法に関する実践研究

代表研究者 西村 亮彦（国土舘大学理工学部まちづくり学系 准教授）

[研究報告要旨]

本研究は、「デザイン思考」の概念的枠組みを用いて、公共空間再生に係る社会実験のデザイン技術を体系的に整理・モデル化するとともに、「DIY アーバニズム」の手法を取り入れた社会実験によるモデルの実証を通じて、効果的な公共空間再生のデザイン手法を構築することを目的として、以下の4つの研究項目を実施した。

- ① 令和2～4年度にかけて「官民連携まちなか再生推進事業」に採択された141件の取組に対するアンケート調査を実施し、回答のあった97件の中から社会実験を実施している事例30件を抽出し、基礎的な分析を行った。社会実験のプロセスを、①構想、②計画、③設計、④実施、⑤評価、⑥今後の展開の6段階に分けて、アンケート調査の結果をもとに、社会実験の目的や内容に応じた課題・工夫について整理を行った。
- ② アンケート調査の結果を踏まえて、全国各地における取組の参考となる知見を得るために、参考となる知見を多く含むベストプラクティスとして7団体に対するヒアリング調査を実施し、社会実験のプロセスと空間デザインに関する具体的な課題と工夫を把握し、6段階別に留意事項を整理した技術体系を提示した。
- ③ 研究代表者個人、又は国土舘大学都市デザイン研究室として関わりのある地方自治体や地域団体と連携しながら、道路空間をはじめとする公共空間の再編・利用を目的とした社会実験の企画・実施に取り組んだ。地域の多様な関係者による公共空間再生の社会実験を5地域で企画し、DIYで設計・製作した仮設的装置による13回の社会実験を実施した。
- ④ 公共空間の再生や持続的なまちづくりの観点から各社会実験の効果を行動調査やアンケート調査等により計測・評価するとともに、事後評価の結果をデザインの技術体系へフィードバックし、社会実験デザインのモデルを構築した。

今回、モデル実証のために大学研究室で取り組んだ社会実験は、いずれも一過性の取り組みではなく、継続的なまちづくりの一環として取り組まれるものであることから、本研究の成果を今後のまちづくりにフィードバックさせながら、より円滑で効果的な公共空間の再生を図ることが期待される。